エアロゾル療法の慢性副鼻腔炎への応用

その歴史・現況・さらに将来への展望

帝　京　大　学
佐　藤　素　一

エアロゾル療法の慢性副鼻腔炎に応用した過去20数年の経験をもとに，鼻腔内生理の仮説をまじえながら，これまでの足どりと，これと併せて将来の治療に対する展望について，以下のようにまとめた。

① まず，エアロゾル療法の対象となる，鼻腔並びに副鼻腔入口部の生理，およびその個所のダイナミック運動について私見を述べた。

② 生理空間のある場合，エアロゾル粒子はかえって咽頭に，さらには下部気道に進入し，鼻腔への沈着が減少するのではないかとの推論を見直し，「拡」と「狭」の存在する生理空間こそが，エアロゾル療法に不可欠であり，これが有効に作用するメカニズムを創り出している必要性を強調した。

③ エアロゾル発生装置，精製薬剤などのハードウェアも勿論重要であるが，これを用いて行うソフトウェア部門も検討し，多面的データの１つ１つに厳しい目を向けながら，それに即応できる態勢にもちこむことが，将来の本疾患治療に良好な結果をもたらす点を力説した。